長万部町「神遊の桜」オオヤマザクラの樹勢回復措置・その３

１　はじめに

「神遊の桜」は、NPO 法人「長万部町緑と樹を愛する会」の前理事長の丹野利春氏の所有のカラマツの林に囲まれた一本のオオヤマザクラです。

2020 年７月に出版された「日本の古桜　一本桜探訪　それでも生き残って欲しい桜たち」（葛城三千子著　右文書院）では、「神遊の桜」という名のカスミザクラと紹介されていますが、オオヤマザクラです。

「神遊の桜」は、2020 年から大枝が枯れ始めたため、2021 年、2022 年に、樹勢回復措置として、気根誘導、縦穴式土壌改良法等を行い、2023 年は、５月２日、11 月 16 日に施肥等を行いました。

２　2023 年５月２日の施肥等の実施

当社樹木医の木戸口和裕は、地元の高野亮三氏と丹野利春氏のご息女の和田真知子氏の３人で「神遊の桜」を訪れました。まず、驚いたことは、この「神遊の桜」は開花して、しかも満開だったことです。

木戸口が高野亮三氏にこの桜を初めて案内された日は 2012 年５月 14 日ですが、この時も満開でした。開花の初日は承知していませんが、2012 年と 2023 年を単純に比べると、12 日ほど開花が早まっている可能性があります。2023 年は特に暑い年でしたが、この桜は、開花時期によって地球温暖化の影響を警告しているのではないかと思われました。

「神遊の桜」　　2012.05.14

「神遊の桜」　　2023.05.02

「神遊の桜」クマゲラによる穴　2023.05.02

「神遊の桜」胴吹き　　2023.05.02

雪解け後で、桜への施肥とともに、①気根誘導のため、2022 年に幹に垂直的に張り付けたピートモスの団子が崩落していないか、②大枝が落ちていないか、この点についての状況確認が目的で訪れました。上記①は、ピートモス団子は付着したままで、崩落はありませんでした。上記②は、大枝の枯損はなく、安堵しましたが、幹の内部腐朽は進んでいるようで、クマゲラが突ついた穴が目立っていました。気根誘導や施肥が効いていると見えて、胴吹きが多く見られたことに希望を感じました。胴吹きの枝からオオヤマザクラやヤマザクラに見られる茶色の若葉が出てきていました。

施肥は、砂川産堆肥１袋 20L とフルボ酸の植物活性剤固形化資材「フジミン®Forest」1kg 程度を小車で「心臓破りの坂」を登って、人力で散布しました。開花前の施肥と思ってきましたが、開花期の施肥となりました。

「神遊の桜」施肥状況　　2023.05.02

3　2023 年 11 月 16 日の施肥等の実施

木戸口と高野亮三氏は、半年ぶりに「神遊の桜」を訪問しました。腐朽による大枝の落下は見当たりませんでした。穴あけ器によるエアレーションを行い、砂川産堆肥１袋 20L とフルボ酸の植物活性剤固形化資材「フジミン®Forest」1kg 程度を、小車で「心臓破りの坂」を登って、根の分布域に人力で散布しました。施肥は「寒肥え」となります。

「神遊の桜」　　2023.11.16

「神遊の桜」施肥状況　　2023.11.16

4　一本桜とは言えない「神遊の桜」

「神遊の桜」の周辺は主にカラマツ林が囲んでいます。成長の早いカラマツを植えて安定的な林業経営の安定化と、この桜への防風効果を目的とした植林と思われます。今回、2012 年と 2023 年の「神遊の桜」の満開写真を添付していますが、これを比較して見ますと、カラマツの樹高が伸びており、このため、日当たりが悪い横枝は枯れて、比較

的日当たりの良い垂直方向の二つの主幹だけが残っています。「神遊の桜」は、かつては草地内にあり、確かに一本桜であった時期もありましたが、カラマツなどが植えられた時点で、「森林内の桜」、「山間地の桜」への道を歩んでおり、カラマツの樹高が上回るようになると、今度は「枯死」の道を歩むことになります。

樹木医の鶴田誠氏は、桜の育て方の基本として、桜を「太陽の子」「極端な陽樹」であると言っています。このことを肝に銘じておけば、樹勢回復として気根誘導や施肥などによる土壌改良に取り組む前に、カラマツの伐採をもっと早く助言すべきであったと反省しているところです。必ずしも伐採の助言が森林所有者に受け入れられる訳ではありませんが。

5　終わりに

「神遊の桜」は天然木ですが、桜を人の手で沢山植えたところでは、「太陽の子」問題は深刻化しているところが多くあります。従って、沢山の桜の植栽を計画する場合は、育樹計画も意識して、植栽間隔の検討を十分行うことが極めて重要です。

道内各地で植樹祭が開催されていますが、トドマツのような陰樹の用材生産を目的としているとしか思えないような密植で、桜を植栽しているところが見られます。育樹も意識した「お手本」の植栽を示していくべきで、場合によっては、「桜を植えない勇気」を持つことも必要ではないかと思っています。